

平成30年度学校心臓病検診結果報告

新潟市医師会学校心臓病判定委員会委員長 坂野 忠 司

現行の検診方法

図1に現在新潟市で行われている学校心臓病検診の運用方法をお示しします。小、中、高校の各1年生全員に対し一次検診として問診票の配付、心電図検査を行います。この問診票より家族歴や既往歴および身体状況が把握されます。追跡症例は前年度からの経過観察例で各学校の2年生以上が対象になります。またこれらとは別に学校医の判定により精密検査の対象となる人がおります。一次検診心電図の自動診断を判定医が精密検査対象者に抽出するかどうか選別を行います。精密検査対象者はメジカルセンターまたは専門の医療機関で診察並びに必要な応じさらなる検査を実施します。メジカルセンターでの検査結果にて他医療機関へ受診となることもあります。

学校心臓病検診結果の概要

表1に小学校、中学校、高校別に分けて検診結果の概要を示しました。平成30年度の対象となる学校の在籍者の合計は60,303人で前年度比-351人でありました。最近の某新聞社の記事によると、国の公的機関所属の人口問題研究者の分析によれば今後50年は出生数の減少傾向は続くというショッキングな内容です。一次検診実施者は小、中、高あわせ13,374人で、このうち一次検診の要精検者となったのは全体の5.1%に当たる681人でした。追跡症例と学校医からの症例を合わせ全体の要精検者は1,578人で、最終的に要管理者951人、管理不要者545人と判定されました。

精密検査受診状況

表2は要精検者がメジカルセンター、他医療

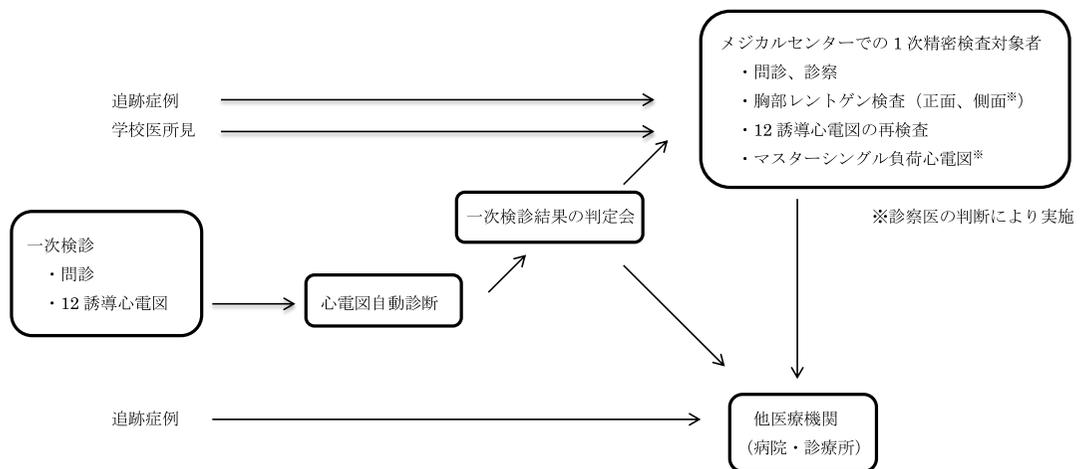


図1 新潟市学校心臓病検診の流れ

表1 平成30年度 学校心臓病検診結果

2019.11.25現在

		在籍者 (A)	一次検診実施者 (B)	B/A%	自動診断抽出 (C)	C/B%	一次検診要精検者 (D)	D/B%	追跡症例	学校医所見	要精検者 (E)	精検受診者 (F)	F/E%	要管理者 (G)	G/F%	管理不要者 (H)	H/F%
小学校	1年	6,529	6,506	99.6	963	14.8	296	4.5		12	308	304	98.7	183 (30)	60.2	121	39.8
	2年以上	32,939	34		7	20.6	3	8.8	530	53	586	545	93.0	413 (132)	75.8	132	24.2
	小計	39,468	6,540		970	14.8	299	4.6	530	65	894	849	95.0	596 (162)	70.2	253	29.8
中学校	1年	6,385	6,351	99.5	1,176	18.5	357	5.6		10	367	361	98.4	139 (34)	38.5	222 (2)	61.5
	2年以上	13,022	10		2	20.0			269	13	282	256	90.8	205 (46)	80.1	51	19.9
	小計	19,407	6,361		1,178	18.5	358	5.6	269	23	649	617	95.1	344 (60)	55.8	273 (2)	44.2
高校	1年	477	465	97.5	96	20.6	24	5.2			24	24	100.0	9 (2)	37.5	15	62.5
	2年以上	951	8		3	37.5	1	12.5	10		11	6	54.5	2	33.3	4 (1)	66.7
	小計	1,428	473		99	20.9	25	5.3	10		35	30	85.7	11 (2)	36.7	19 (1)	63.3
合計	60,303	13,374		2,247	16.8	681	5.1	809	88	1,578	1,496	94.8	951 (244)	63.6	545 (3)	36.4	

* 在籍数はH30年5月1日現在
(): 術後の再掲

表2 精密検査受診状況

		要精検者	精検受診者			未受診者
			メジカルセンター	他医療機関	計	
小学校	一次検診	299	170	124	294	5
	追跡	530	63	428	491	39
	学校医所見	65	32	32	64	1
	計	894	265	584	849	45
中学校	一次検診	357	281	70	351	6
	追跡	269	79	164	243	26
	学校医所見	23	12	11	23	0
	計	649	372	245	617	32
高校	一次検診	25	20	5	25	0
	追跡	10	2	3	5	5
	学校医所見	0	0	0	0	0
	計	35	22	8	30	5
合計	一次検診	681	471	199	670	11
	追跡	809	144	595	739	70
	学校医所見	88	44	43	87	1
	計	1,578	659	837	1,496	82

機関のいずれで管理されているかの検討です。要精検者1,578人中メジカルセンター受診者659人、他医療機関受診者は837人でした。

精密検査の結果（管理区分）

メジカルセンター受診者659人中管理不要となった人は63.6%にあたる419人でした。一方、他医療機関受診者837人中管理不要者は15.1%の126人でした。よってメジカルセンターの役割は今後の管理が必要かどうかのスクリーニングが主体といえます。これは実際に運動制限が必要となる管理区分B、C、Dの学童の殆どが他医療機関での管理でしたが、ただ例外的にメ

ジカルセンター受診者の小学生で1人だけが管理区分Bでした（表3）。

診断および管理区分による精検結果

心電図異常や先天性心疾患の人数は例年とほぼ同じです。川崎病はわが国の2年毎の集計による疫学調査でもその増加傾向が指摘されるよう、今年度も227人と増加しておりました（表4）。

心電図所見による管理区分

心電図異常では期外収縮が230人と最も多く、次いで心室内伝導障害56人、WPW症候群42人

表3 精密検診結果（医療管理区分）

	精検受診者	要管理者							計	管理不要者
		A	B	C	D	E				
						1年後	2年後			
メジカルセンター	小学校	265	1(1)			110(1)		111(2)	154	
	中学校	372				124		124	248	
	高校	22				5		5	17	
	計	659	1(1)			239(1)		240(2)	419	
他医療機関	小学校	584	2(1)	6(4)	7(4)	449(146)	21(5)	485(160)	99	
	中学校	245		2(2)	4(2)	208(74)	6(2)	220(80)	25(2)	
	高校	8				6(2)		6(2)	2(1)	
	計	837	2(1)	8(6)	11(6)	663(222)	27(7)	711(242)	126(3)	
総計	1,496	3(2)	8(6)	11(6)	902(223)	27(7)	951(244)	545(3)		

* (): 術後の再掲

表4 診断および管理区分による精検結果

	有所見者	医療区分				管理不要者
		要管理者			観察のみ	
		1年後	2年後	観察のみ		
心電図異常	453(2)	305(1)		44(1)	104	
先天性心疾患	397(244)	334(210)	11(7)	41(24)	11(3)	
川崎病既往	227	126	10	7	84	
胸部X線異常	5(1)	1(1)			4	
心臓弁膜症	55	44	6	4	1	
心音異常	12	2			10	
心筋疾患	8	5		3		
その他の循環器疾患	8	7			1	
循環器以外の疾患	2	1			1	
有所見者合計	1,167	825(212)	27(7)	99(25)	216(3)	
異常なし	329				329	
合計	1,496(247)	825(212)	27(7)	99(25)	545(3)	
		951(244)				

* (): 術後の再掲

表5 心電図所見による管理区分

	有所見者	医療区分			
		要管理者			管理不要者
		1年後	2年後	観察のみ	
電気軸異常	9	2		7	
心室肥大	10	7		2	
異常P波	1			1	
異常Q波	2	1		1	
心室内伝導障害	56	16		39	
WPW症候群	42(1)	31		3	
心筋障害	8	5		3	
異常QT波	41	31		2	
異常洞調律	8	4		4	
期外収縮	230	181		31	
発作性心臓頻拍	8(1)	5(1)		2	
補充収縮・補充調律	7	4		2	
房室ブロック	29	16		7	
房室(干渉)解離	2	2			
合計	453(2)	305(1)		104	
			44(1)		

* (): 術後の再掲

表6 先天性心疾患の診断名による管理区分

	有所見者	医療区分			
		要管理者			管理 不要者
		1年後	2年後	観察のみ	
心室中隔欠損	169(90)	141(78)	3(1)	16(9)	9(2)
心房中隔欠損	69(46)	57(38)	4(3)	7(5)	1
心内膜床欠損	11(10)	11(10)			
ファロー四徴	12(11)	12(11)			
肺動脈弁狭窄	32(10)	27(9)	1	4(1)	
動脈管開存	32(24)	24(16)	3(3)	4(4)	1(1)
肺静脈還流異常	10(10)	9(9)		1(1)	
大動脈弁狭窄	9(3)	7(3)		2	
完全大血管転位	9(8)	9(8)			
修正大血管転位	2(1)	2(1)			
両大血管右室起始症	8(8)	7(7)		1(1)	
総動脈幹遺残	3(3)	3(3)			
三尖弁閉鎖症	4(4)	4(4)			
単心室	4(4)	4(4)			
大動脈縮窄	5(5)	3(3)		2(2)	
エプスタイン病	1			1	
肺動脈弁閉鎖症	2(2)	2(2)			
バルサルバ洞動脈瘤	1(1)	1(1)			
冠動静脈瘻	2	1		1	
左冠動脈肺動脈起始	4(2)	3(2)		1	
二弁性大動脈弁	3	3			
大動脈離断症	2(2)	1(1)		1(1)	
三心房心	2	2			
血管輪	1	1			
合計	397(244)	334(210)	11(7)	41(24)	11(3)

* ():術後の再掲

表7 過去8年間の学校心臓病検診結果

年度 (平成)	在籍者 (A)	一次検診 実施者 (B)	自動診断 抽出 (C)	C/B%	一次検診 要精検者 (D)	D/B%	追跡 症例	学校医 所見	要精検者 (E)	精検 受診者 (F)	F/E%	要管理者 (G)	G/F%	管理 不要者 (H)	H/F%
23年度	65,024	14,116	2,601	18.4	883	6.3	876	89	1,848	1,783	96.5	1,072	60.1	711	39.9
24年度	64,257	14,161	2,823	19.9	808	5.7	908	98	1,814	1,748	96.4	1,078	61.7	670	38.3
25年度	63,728	14,033	2,782	19.8	787	5.6	924	84	1,795	1,706	95.0	1,000	58.6	706	41.4
26年度	62,569	13,974	2,457	17.6	710	5.1	857	104	1,671	1,584	94.8	968	61.1	616	38.9
27年度	61,936	13,678	2,117	15.5	705	5.2	856	71	1,632	1,517	93.0	910	60.0	607	40.0
28年度	61,277	13,615	2,191	16.1	634	4.7	813	75	1,522	1,424	93.6	906	63.6	518	36.4
29年度	60,654	13,345	2,225	16.7	751	5.6	777	82	1,610	1,525	94.7	921	60.4	604	39.6
30年度	60,303	13,374	2,247	16.8	681	5.1	809	88	1,578	1,496	94.8	951	63.6	545	36.4

でした。WPW症候群の1名と発作性心臓頻拍の1名に手術が施行されておりました(表5)。

先天性心疾患の診断名による管理区分

先天性心疾患では心室中隔欠損(169人)、心房中隔欠損(69人)、動脈管開存(32人)、肺動脈弁狭窄(32人)の順に症例数が多く、この4疾患で全先天性心疾患397人の76.1%を占めて

いました。この表には示されておりませんが、心房中隔欠損、動脈管開存、肺動脈弁狭窄の3つの疾患に対して最近ではカテーテル治療が行われる症例が増えていると考えられます(表6)。

過去8年間の学校心臓病検診結果

表7に過去8年間の結果を比較しました。これによれば在籍者数減少に伴う各実数は当然の

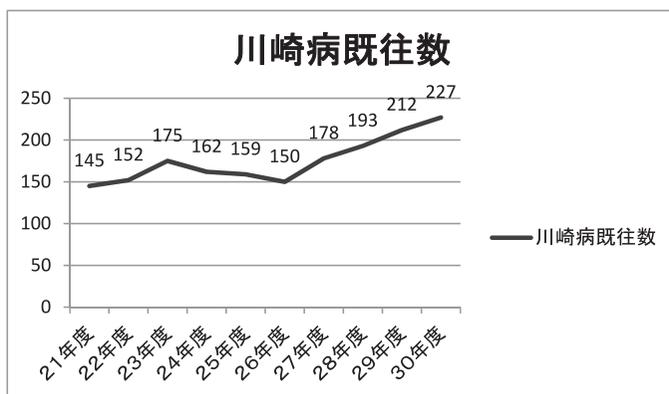


図2 過去10年間の川崎病既往数

ことながら減少しています。一方学校医所見の抽出においては校医の判断によるため、一定の減少とはいえないところがあるようでした。

川崎病の経過観察数

図2に過去10年の川崎病の経過観察数を示しました。平成26年度の150人で減少傾向が止ま

り以後は一貫して増加に転じております。先にも述べたとおり、国内の疫学調査でも川崎病の増加が示されていることより、今後も注目していく必要があるかと思えます。

最後にこの検診業務を支えてくださっている関係者の皆様に感謝申し上げます。